

関与型調査で追い求める より良い社会

リベラルアーツ教育研究院/
環境・社会理工学院社会・人間科学系

弓山 達也 研究室

ゆみやま たつや 弓山 達也 教授 1963年奈良県生まれ。大正大学大学院文学研究科宗教学専攻博士課程修了。2015年、東京工業大学大学マネジメントセンター教授。2016年、改組により同大学リベラルアーツ研究教育院／環境・社会理工学院社会・人間科学系教授。



弓山先生の研究室では関与型調査という手法を用いてスピリチュアリティについて研究を行なっている。この手法を用いることでより社会に働きかけるような研究を行えるという。本稿ではそのような手法を用いて行なっている二つの研究について紹介するとともに、先生の研究に対する考え方について触れていく。

人文科学系の研究とは

東工大という理工系の研究室が多く存在する大学の中にも、文系の一つである人文科学系の研究室が存在している。本稿で紹介する弓山研究室もその一つである。

文系には主に社会科学系と人文科学系の2つの分野がある。社会科学系の研究では一般的な法則を見出すことが重要視される。それに対して人文科学系の研究対象になるものは、必ずしも測定や実験によって客観的にとらえられるものではない。そのため、一般的な法則を見出すことは難しいという特徴がある。対象を観察するという手法を用いたとしても、そこには主観や対象への影響が少なからず含まれてしまうのだ。

現在、先生は主にいのちやこころの教育と東日本大震災後の社会について研究を行なっている。これらの研究はいずれも人についての研究であり、上に挙げたような主観性が往々にして含まれてし

まう。しかし先生はむしろ研究対象に自ら積極的に関わることで影響を相互に及ぼし合い、それを受けて生じた変化を記録するという方法を用いている。この方法では研究対象とともに一つのプログラムを行うようなアクションリサーチや、対象とともに同じ活動を行いながら観察を行う参与観察という方法が行われる。これらの研究でも、自ら教育現場を訪れたり、震災の復興のためのボランティア活動に参加したりと積極的に研究対象に関わる方法を用いている。以下ではこのような方法で行われている先生の研究について具体的にみていく。

いのちやこころの教育プログラムの開発

弓山先生が教育について研究を始めたきっかけは、前の大学で教育学科にいたため、実際に教育現場を見る機会があったからである。先生はいのちやこころの教育のモデル校として選ばれた学校

を訪れていたそうだ。いのちやこころの教育とは、道徳教育の枠に収まらず、家庭や生涯教育の中で行われるものである。訪れた学校で、先生はさまざまな授業の様子を目にした。良い例としてはある学校で行われていた道徳の授業である。そこではある木を題材として授業が行われていた。その地域では昔、災害の際に木に登って避難を呼びかけていたという。したがってその木は絶対に切ってはならないと言われていてきたため、木を回り込むように道路が作られたのだ。しかし、近年道路の交通量が増え、その道で死亡事故が多発するようになった。授業ではこの木を題材とし、木を切るべきか否かを生徒に考えさせていた。一方、あるところでは題材として一つの漫画を用いていた。その漫画は、小さい女の子がライオンがシマウマを食べる映像を見てかわいそうと思い、自分は肉を食べず野菜とパンだけを食べて生きていこうと考えるのだが、そこで野菜やパンは生きていないのかと悩む話だ。この題材を用いて生徒に議論をさせて授業を行っていた。しかし、授業を行っていた先生がこの議論の落とし所として持ってきたのは、調理員にありがとうを言おうという結論であり、いのちの大切さを扱った題材とはずれたものであった。

授業の現状に加え、弓山先生は教員の現状にも問題点があると考えている。教員は平日は授業、土日は部活の担当に追われ、休む暇もない。加えて、教員の入れ替わりが激しく、公立の小中学校では10年の間に教員はほとんど入れ替わってしまうのだ。

これらの教育現場の様子を見て先生が感じたことは3つある。1つ目は教員の力量の差である。道徳教育という、具体的な内容が定まっていないものを教えるには、教員の力量が大きく問われるのだ。2つ目はいのちやこころの教育にまで教員の手が回っていないということだ。通常の業務の忙しさによっていのちやこころの教育について考える余裕がないのである。3つ目は、一つの方法が長続きしないことである。教員の入れ替わりの激しさによって、たとえ良い教育プログラムを作成したとしてもそれを共有する時間がないため、教育プログラムが霧散してしまうのだ。

その経験から先生は、学者の立場からいのちやこころの教育の教材や、その教材づくりのための資料を集めて、自由に閲覧できるような形にまとめることを目指している。同じような環境を持つ地域が地域性を活かしてどのように教育を行なっているのかを検索できるようにするだけで、担当教員の手助けになるのではないかと考えているからだ。実際に先生は予算をとって、収集した資料を自由に閲覧できるポータルを作る計画を立てている。

また、そのうえで先生は誰もが行えるようないのちやこころの教育プログラムやその教育プログラムの策定方法の開発を行なうことを考えている。実際にプログラムを作るにあたって先生が大切にしていることがある。それは異なる価値観を持った人と接することで子供や若者は成長するということだ。これは先生の経験のなかで得られた考えである。前の大学にいたとき、学外のコミュニティスペースでゼミ活動を行っていた。ここでは、教室とは違って地域の高齢者や障害者の方とともに活動するという機会があった。学生は最初はまったく関心を持っていなかったそうだが、半年もすると自ら高齢者や障害者と関わり、優しい言葉をかけるようになったという。この経験を教室の中で行えるようにすることで新しい教育プログラムを作りたいと先生は考えている。先生が考えた方法は、ある題材について生徒に考えさせ、対立した意見を教室内で生み出すという方法である。例えば、前述の木を題材とした授業の場合、生徒に木を切るべきか話し合いをさせると、意見は必ず割れるだろう。このような題材を用いて生徒に考えさせることで1つの教室内で異なる考えを持つ人を作ることができ、異なる考えを持つ人として生徒同士に接してもらうことで、生徒が他者や自分自身について思いをめぐらせる。そうすることで、生徒を大きく成長させることができるのだ。

このような手法は一般にモラルディレンマと呼ばれている。これを用いる際は題材の選び方が重要となる。題材は地域の歴史に根ざしているものや、生徒に身近な問題であると良いと先生は考えている。このような題材を用いることで生徒に問

題をリアルに考えさせることができるのだ。前述の木の題材も地域の歴史に根ざした題材である。しかし、あまり歴史のないニュータウンのようなところであると、地域の歴史に根ざした題材選びは難しいが、身近な題材は目を凝らして見るとさまざまなところに存在している。例えば、現在東京の公立小学校では30人に1人の割合で外国人の生徒になる。そのような子にどうやって勉強を教えるべきかを生徒が考えることで、自分と異なる考え方を持つ人について考えることができるのだ。

しかし、こうした授業を行うことで生じる問題もある。一つは適切な題材選びについてである。例えば、同じクラスにいる外国人の生徒について考えると、当事者を題材とすることになり反発が起りかねない。誰もが納得でき、そのうえで生徒にも考えてもらえるような題材を選ぶことは難しいのだ。もう一つは普遍的な価値観を教えることについてである。世界平和のような普遍的な価値観を教えるにしても、それを先生の価値観の押し付けであると言われると、先生という立場上反論することは難しいのだ。

最終的には学校の教員とともに先生の開発したプログラムを行うことを目指しているが、現在はまだその段階まで達しておらず外からのちやこころの教育について観察している段階であるようだ。現在、学校教育においては偏差値やテストの点数のような目に見えるかたちの学力がメインに置かれているのに加えて、これまでに挙げたようないくつかの問題点がある。その状況の中で先生は、将来的に生徒にのちやこころのような目に見えないものの価値に気づかせることができるような教材を提供できるようにしたいと考えている。

東日本大震災後の社会を考える

弓山先生が東日本大震災に関わるようになったのは突然のことだった。震災の発生直後に、前の大学で大学をあげてボランティア活動をするようになったのだ。先生はこのボランティア活動で学生を南三陸へ連れて行くリーダーの一人に指名され、学生とともにボランティア活動を行うことになった。最初は震災について研究したいという思

いもなく、ボランティアに関するノウハウもまったくないところからのスタートだった。そのような状況でも学生を何度かボランティアに連れて行き、ともに活動するうちに、先生は連れて行った学生が短期間で大きく変化するところを目の当たりにした。例えば最初は畑でのボランティア活動を面倒に思っていた学生も、4日間のボランティア活動が終わるころには嫌いだった畑がきれいに思えるようになったと言っていたという。短期間でその学生の価値観が大きく変化したのだ。また、先生は被災地の宿泊施設で四国出身の女性と出会った。その人はボランティアをきっかけに考え方が変わり、今では被災地の方と結婚してボランティア活動を仕事に生活しているという。被災地でのボランティア活動をきっかけに、大きく価値観が変わったり、今までと全く異なる人生を送ったりする人がいることが、とても興味深く、被災地に関心を持つようになった。

その後定期的に被災地に足を運ぶようになった先生は、被災地で新しい生き方が生まれていることに気づいたという。そのきっかけが震災から4年後の3月11日に福島にある福島産の食材を中心とした料理を出すレストランを訪れたことだった。どうしても福島産のものが避けられてしまう状況の中で、福島の人が堂々と福島産のものを安全で、美味しいものだと言っているところを目にしたという。福島の人でさえ福島産のものを勧めることに後ろめたさを感じる風潮の中で、その価値観を変え、勇気をもって福島の人たちが立ち上がったのだ。

それ以来先生は、東北に住み自らの生き方を変えようとしている人々のところに積極的に足を運び、関わるようにしているそうだ。そのなかで、積極的に意志決定に関わるようになった若者たちと出会った。東北といっても若者たちは都会志向で、それほど自分の地域のことに強い関心がある訳ではない。しかし、震災をきっかけにそれが変わり、現在では新しい街作りの会議という意味決定の場に小中学生が参加している場合もある。

また、新しいライフスタイルを送るようになった人とも出会った。原子力発電所の事故をきっかけに原発はいらないという機運が生まれ、電気を

使わないで生活する人や、炭焼きを復活させようとしている人もいる。都市的でないスローライフのようなものが被災地から生まれているのだ。

これらの生き方の変化は震災による絶望から生まれたのではないかと先生は考えている。震災によって被災者は多くのものを失った。もはや失うものはないというところから、もう一度人生を見つめ直したとき新しい生き方にたどり着くことができたのだ。震災をただ絶望と捉えるだけでなくその絶望がこれからの人生について深く考える機会を人々に与えたとも捉えることができるはずだ。震災をきっかけに新しい生き方にたどりついた人々がこれからの社会を変えていくだろう。そして、その生き方が被災地から全国に広がることで豊かさや幸福の基準が一つでなく、それらが反発することなく整えられているような社会ができていくと先生は考えている。

先生は現在活動の手伝いをしながらその記録を留めている。そして、これから新しい生き方が被災地で始まっているということについて研究を進めていきたいそうだ。上の例以外にもどのような新しい生き方が生まれているのか、新しい生き方が過去のどういうものに影響を受けているのか、ということをもとめていくということが考えられている。

スピリチュアリティと研究

先生は現在、教育や震災についての研究を行っているが、もともとの専門は宗教であった。研究を始めたころは、宗教団体についての年表作りや辞書作りを行っていたという。しかし、宗教に関わり人が大きく変化する現場を目の当たりにしながら、それを客観的に観察し年表や辞書のような基礎的な研究から現在社会において一般的とされているような生き方とは異なる生き方に人々がどのようにしたら気づけるか、それを先生自身がどのようにしたらサポートできるかという研究へと変化していった。そのような研究の中で用いられるのが、アクションリサーチや参与観察である。アクションリサーチは主に教育学や社会福祉で用いられる手法であるのに対して、参与観

察は主に社会学で用いられる手法である。先生は、この2つの手法をさらに一歩進めて、対象に自覚的にコミットメントする関与型調査というものを提唱している。関与型調査のような応用的な手法を用いることで、先生はより社会へ働きかけることのできる研究を行っている。その中で、この社会においてオルタナティブな生き方に気づくということ先生はスピリチュアリティという言葉で表せるということに気づいた。現在、合理性や経済的豊かさが人生で最も大切なもののように扱われているが、そうではない生き方、つまり目に見えないものの意味に気づいたり模索したりする生き方も存在しているはずである。先生はそのような生き方のことをスピリチュアリティと表せると考えている。

先生は現在スピリチュアリティにより人の生き方が変わり、それによって社会が良くなることを後押しできるような研究がしたいと考えている。これは宗教に関することだけでなくボランティアのコーディネーターや教育関係のこと、被災地の復興支援などにも大学から任されて関わることになったことによる先生の中に生まれた考えである。宗教団体について研究したいと思っていたところから、関与型調査のような積極的に関わる手法を用いることで先生の価値観が変化したのだ。

このような先生の研究に対する考え方は先生の研究室でも活かされていくはずだ。先生の研究室は今年の4月にできたばかりの研究室である。これからどのように研究を進めていきたいか聞くと、文献だけでなく自らの問題として現代社会の問題に関わりながら研究を進めたいと語っていた。ものごとを客観的に見るだけではなく実際に研究対象に寄り添う弓山研究室の研究は、これからの社会をより良いものに変えていくだろう。

執筆者より

取材時には研究内容について分かりやすく説明していただき、質問にも丁寧に答えてくださり、記事を書き上げることができました。お忙しい中取材を快く取材を引き受けてくださった弓山先生に心より御礼申し上げます。（金子 奈帆）